

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：14403

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720175

研究課題名（和文）英語の他動詞・自動詞の交替と中間動詞の習得に関する認知言語学的研究

研究課題名（英文）A Cognitive Study of Acquisition of Transitive-intransitive Alternations and Middle Verbs in English

研究代表者 谷口 一美 (TANIGUCHI KAZUMI)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80293992

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、認知言語学および構文文法の観点に基づき、英語における動詞の自他交替と中間動詞の習得プロセスを探求することを目的とした。そのために、こどもの発話のデータベースである CHILDES を使用し、他動詞と同形の非対格自動詞の出現状況を、こどもと対話者の大人の発話から抽出し分析した。その結果、こども・大人共に他動詞と同形の非対格自動詞は中間動詞的機能を担っている点、大人の発話には特定表現を多用するインプットの偏りや特定構文への埋め込みなど、自他交替の習得を促進する機能が見受けられる点が明らかとなり、他動詞構文から中間動詞および非対格自動詞構文の成立のプロセスの一側面が示された。

## 研究成果の概要（英文）：

This study aims to explore the acquisition of transitive-intransitive alternations and middle verbs in English based on the view of cognitive linguistics and construction grammar. The method employed here is to observe children's and their caregivers' utterances accommodated in CHILDES and analyze their use of unaccusative intransitive verbs. As a result, it has been shown that the early usages of unaccusative verbs both by children and by adults emerge as middle verbs, and that adults' utterances of the unaccusative verbs include some devices which help children acquire novel usages: extremely frequent use of the same token (i.e. skewed input), and embedding into a specific construction. These results of the investigation suggest an aspect of the formation of a grammatical construction, that is, the development of the middle and unaccusative constructions out of transitive constructions.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英語学・言語学

キーワード：言語習得、構文文法、自他交替、非対格自動詞、中間動詞、使用基盤モデル、exemplar-based model

## 1. 研究開始当初の背景

本研究に先行し、平成 18-20 年度基盤研究 (B)「英語中間動詞構文の統合的分析から見た生成文法と認知言語学の接点」の研究分担者として、認知文法・構文文法的立場からの研究を担当した。特に使用基盤モデルの観点から中間構文の習得過程を考察するために、データベース・CHILDES (MacWhinney 2000) を用い、初期獲得動詞のひとつである open の中間用法的事例の分布を詳細に調査した。その結果明らかになったのは以下の事実である。

- ① 3 歳前後の子どもが初期に発する中間構文が “Does this open?” といった疑問形や “That door doesn’t open” のような否定形が主である
- ② 大人から子どもへ向けられた発話の大多数が否定形 (That doesn’t open) となる強い傾向を示したことである。すなわち、インプット・アウトプット共に、中間構文の典型的な事例は “This door opens easily.” のような (文法理論では代表例となることの多い) 肯定形ではない。

このことは、Budwig, Stein and O’Brien (2001) による「英語を母語とする子どもは、自らの意図を妨げる抵抗力を認知する環境で中間構文を用いる」との指摘にも合致する。さらに事態概念の観点から考察すると、「対象物が原因となり、子どもが自ら意図した行為が達成できない」という特定の文脈において対象物へ注意の焦点を向けることが、他動的事態から動作主を分離させ「対象物」を焦点化させる自動的事態の概念化の第一段階と想定することができる。この場合、自動的事態は「行為を意図する動作主」の存在をおのずと前提とすることになり、中間構文的であると言える。それゆえ、「同一の他動詞形を持つ英語の非対格自動詞は、中間動詞的な段階を経て習得される」と仮説を立てるに至った (谷口 2009)。

## 2. 研究の目的

上述の研究成果を受け、本研究は「中間動詞を介在した自動詞形の習得」との仮説に立脚し、英語での他動詞と自動詞の交替の習得をより広範に、実証的に調査することを目的としている。英語の場合は他動詞と非対格自動詞が全くの同形であり、両者を形態的に区別する手段を持たないという点で特異であり、当然ながらすべての他動詞が自動詞へと交替するわけでもない。子どもにとって、同形の他動詞と非対格自動詞を区別し習得すること自体が容易なタスクではなく、実際に

3~4 歳頃の子どもによる自動詞形 (中間動詞) の過剰生成が観察されている (Lord 1979)。そのような過剰生成期を経て、子どもがどのようにして適正な交替パターンを習得し、非対格自動詞となる他動詞、中間構文となり得る他動詞、いずれの用法も持たない他動詞を分別していくかは、より詳細な検討を要する問題である。

したがって、本研究は、以下に挙げる課題を設定した。

- ① 英語話者のこどもの発話に見られる非対格自動詞・他動詞および中間動詞の使用の分布と発達段階に伴う変化を、実際の使用例から調査する
- ② 他動的事態から、対象物を主語とする自動的事態を表す構文を習得するメカニズムをモデル化する
- ③ 自他交替の習得メカニズムに関して、英語に見られる特異性を明確化する
- ④ 言語習得における事実観察から、構文文法理論への理論的フィードバックを行う

## 3. 研究の方法

本研究は、子どもとその対話者である大人の発話のデータベースである CHILDES を利用し、非対格自動詞・中間動詞をはじめとする自動詞的用法を含む発話を抽出し、その分布状況を調査することで、これらの用法の習得プロセスに関する分析を進め、調査結果を理論的側面から考察した。

## 4. 研究成果

(1) 本研究では、open の非対格自動詞用法と中間構文との関連性を扱った谷口 (2009) の研究を継続的に発展させ、open と同様にモノの空間的移動を意味する move を対象とし、その習得過程に見られる特性を調査した。CHILDES により、モノを主語とする非対格自動詞用法の move を含むこどもの発話・大人の発話を抽出し、その統語的・機能的特徴を分析した。以下の表は、子ども・大人の発話別に、アメリカ英語 (AmE)・イギリス英語 (BrE) での事例数を、統語形式によって分類した結果を示している。

	AmE	BrE	total
疑問形.	4	1	5 (8.6%)
否定形	16	1	17 (29.3%)
<i>make</i> 補文	6	3	9 (15.5%)
その他 使役動詞補文	1	0	1 (1.7%)
知覚動詞補文	6	0	6 (10.3%)
<i>want</i> 補文	3	0	3 (5.2%)
その他肯定形	16	1	17 (29.3%)

【表1 こどもの発話 (move)】

	AmE	BrE	total
疑問系	12	8	20 (15.4%)
否定形	26	4	30 (23.1%)
<i>make</i> 補文	25	1	26 (20.0%)
その他 使役動詞補文	1	0	1 (0.8%)
知覚動詞補文	16	0	16 (12.3%)
<i>want</i> 補文	1	1	2 (1.5%)
その他肯定形	30	5	35 (26.9%)

【表2 大人の発話 (move)】

これらのデータからは、open の場合と同様、move に関しても疑問形・否定形の使用がこどもの発話でも大人の発話でも高頻度で用いられていることが分かるが、それに加え、非対格動詞 move に特有の現象として、make をはじめとする使役動詞の補文や、知覚動詞の補文に非対格自動詞の move が生じている点である。以下、(1)-(2)はこどもの発話、(3)-(4)は大人の発話による事例である。

- (1) a. [5;7.16] making these move.  
 b. [5;6.28] don't make the heads move.  
 c. [2;9.21] can't make # make these wheels move.  
 d. [3;10.09] just xxx and see (th)dese lights, it makes it move.

- (2) a. [3;2.12] I saw that move.  
 b. [2;4.26] neighbor's garden he saw something move.
- (3) a. MOT: I think it's the fact that I was # making # the dragon move.  
 b. MOT: when I move my finger # I make it move.  
 c. INV: that's not really the wind # it's just the curtains # the air makes the curtains move...  
 d. MOT: we can make it [= hanging washer] move.
- (4) a. MOT: watch it move.  
 b. MOT: watch # see it move?  
 c. MOT: look at it move.  
 d. INV: did you ever stand by the window and feel the curtains move?

Savasir and Gee (1982) においても、英語の中間動詞（事実上は非対格自動詞）の習得過程に見られる特徴の一つとして、使役構文への埋め込みが挙げられている。彼らの論稿ではその具体的事例は示されていないが、本研究で調査された使役構文や知覚動詞構文への埋め込みの事例は Savasir and Gee の指摘を強く裏付けるものである。

特に使役動詞の補文として非対格自動詞 move が生じている場合、[make X move] は他動詞の [move X] に等価である。一般的に、他動詞 [move X] ではなく [make X move] / [cause X to move] のように迂言的に述べる場合、後者は間接的使役であるという類似的な動機づけが存在することが知られているが (Kemmer and Verhagen (1994) 参照)、本研究で抽出した使役動詞 make の補文に非対格自動詞 move が生じる (1), (3) の発話には、いずれも使役の間接性は関与していないと判断された。

しかしながら、[make X move] の迂言的形式には言語習得上の利点があると考えられる。それは、迂言的形式の中に [X move] という自動詞用法の語順が透過的に存在している点である。同時に、使役動詞 make の目的語となる「モノ」が自動詞用法の move の主語として機能し得ることも示されている。大人の発話者が [move X] の代わりに敢えて [make X move] の形式を用いることにより、move の他動詞から自動詞への交替をこどもに気付かせているという利点がある。特に大人の発話者の側は、「インプットの偏在」(skewed input)の現象と同様、こどもにとって習得の助けとなる道具として [make X move] が利用している可能性がある。すなわち、「こどもの習得を促す」という目的上、大人の文法とは異なるシステムが機能して

いると想定することができる。

以上、本研究の調査結果からは、非対格自動詞用法の move の習得過程でこども・大人が使用する形式の多様性を示したと共に、こどもにとって習得の助けとして機能するために使用が動機づけられている独自の構文が存在する可能性を示唆した。

(2) (1) の調査結果をふまえ、構文文法における習得理論を再考した結果、Tomasello や Goldberg らの提案する「動詞の島」仮説は、自他交替および中間構文の事例からは必ずしも支持されないとの判断が強まった。その理由は、習得過程において肯定形以外の形式による出現が非常に多数であるにも関わらず、それらからの一般化を行い構文を抽出するのは困難なためである。

そのため本研究では、Bybee (2010) によって提唱された、exemplar-based model の見方による構文文法理論の可能性を検証した。これは、人間の記憶がこれまで想定されていた以上に具体的かつ詳細な情報や事例を蓄え得るものであり、特に一般化や抽象化を伴わず、事例 (exemplar) 間の関連性でカテゴリーを形成し得るといった基本的見方をするものである。

この理論による提案を検証するため、本研究では予備的に、BNC および WordBanks といった代表的コーパスを用い、現代英語における中間構文の exemplar を抽出した。その結果、唯一 exemplar と認定できる頻度で検出されたのは [sell well] であった。さらに [sell well] という exemplar は、過去形での使用頻度も現在形と同程度に高く、主に現在形に時制が限定される中間構文の他の事例とは異なる特徴が観察された。また、動詞 sell に関しては、本来は独立した自動詞用法を持たないはずであるが、Does it sell? のように、副詞を伴わず、あたかも非対格自動詞であるかのように出現することもある。

以上から、高頻度の exemplar である [sell well] は非対格自動詞に近い振る舞いを示すようになっており、中間構文を経由して新たに非対格自動詞の用法が獲得されるという拡張の方向性が仮定される。これは、本研究ではじめに想定したように、こどもが非対格自動詞を習得するためにまず中間構文的表現を習得しているという想定にも合致しており、中間構文を経て非対格自動詞に至るといった方向の妥当性が示された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ①谷口一美 (2009) 「中間構文の習得からみた構文文法的再考」日本認知言語学会論文集第9巻、pp. 309-319.
- ②谷口一美 (2011) 「応用認知言語学と語彙学習—文法理論を英語教育に活用する (2) 一」大阪教育大学紀要第 I 部門 (人文科学) 第59巻2号、pp.63-74.
- ③谷口一美 (2012) 「構文文法の理論的展開とその適用: 英語の中間構文を例に」日本認知言語学会論文集第12巻、pp. 483-495.

[学会発表] (計 5 件)

- ①谷口一美 「習得過程に見られる中間構文の特異性: 構文文法の観点から」日本英文学会関西支部第4回大会ワークショップ (同志社大学, 2009年12月20日)
- ②谷口一美 「応用認知言語学と英語教育」日本英文学会第82回大会 シンポジウム第6部門 「文法理論を英語教育に活用する」(神戸大学, 2010年5月29日) 【招聘】
- ③谷口一美 「認知言語学入門: 基礎から応用・実践へ」日本認知言語学会 認知言語学セミナー、(立教大学, 2010年9月10日) 【招聘】
- ④谷口一美 「構文文法の理論的展開とその適用: 英語の中間構文を例に」日本認知言語学会第12回大会シンポジウム「構文研究の現状と展望」(奈良教育大学, 2011年9月18日) 【招聘】
- ⑤谷口一美 「認知意味論によるメタファー理論」日本英文学会関西支部第6回大会シンポジウム「認知メタファー理論はDeignanの批判にどのように応えるのか—言語と認知の乖離を超えるコーパス・メタファー研究の展望—」(関西大学, 2011年12月18日) 【招聘】

[図書] (計 2 件)

- ①谷口一美 (2011) 「英語における自他交替の習得—open, move を例に—」大庭幸男・岡田禎之 (編著) 『意味と形式のはざま』阪大英文学会叢書6、英宝社. pp. 5-16.
- ②谷口一美 (2012) 「学習に有効なイメージ・スキーマと多義ネットワークの構築にむけて」藤田耕司・松本マサミ・児玉一宏・谷口一美 (編) 『最新言語理論を英語教育に活用する』開拓社. pp. 176-187.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

谷口 一美 (TANIGUCHI KAZUMI)  
大阪教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 80293992